

2009年、私たちが一丸となって闘い、まさに国民とともに成し遂げた政権交代。そのときのマニフェストがここにあります。

その前文には、こう書かれています。

「母子家庭で修学旅行にも高校にもいけない子どもたちがいる。病気になっても病院に行けないお年寄りがいる。全国で毎日、自らの命を絶つ方が100人以上もいる。この現実を放置して、コンクリートの建物には巨額の税金をつぎ込む。一体この国のどこに政治があるのでしょうか。」

これこそが、多くの国民の支持を得て誕生した、民主党政権の、そして今ここに集まっている議員の皆さんの、政治家としての原点であったのだと信じています。

構造改革の名の下に社会保障を削り、地方をないがしろにしてきた自民党政治と、私たち民主党との違いは鮮明なのです。

政権を担って3年。しかし、私たちは未だこの日本社会の疲弊や亀裂を十分には直すことができていません。政権としての未熟さがあったことも事実です。民主党の原点に対する国民の期待が未だ大きいからこそ、その原点を見失いつつあるのではないかと懸念が、厳しい声が、私たちに対し、今向けられています。

今こそ、民主党の原点に立ち返るべきです。

私は立候補にあたり、民主党の代表、すなわち総理大臣の候補となることについて、果たして自分がそれにふさわしいのか、自分にその覚悟があるのか、厳しくそのことを自らに問いながら、困難ではあっても、今、党の再生に我が身を賭けるしかない、との思いに至りました。

そして、党の再生のためには、民主の原点に今一度戻る。政治の信頼と民主党への熱い思いを取り戻すことになるのだとの確信が、私に立候補を決意させたのです。

若い議員の皆さんが、自らの選挙区で有権者の皆さんとどのように接しているのか。如何に厳しい声を受けながらも必死で説明し、がんばっているのか。

その姿は、党の幹部に見えているのか。

国民目線の政治から乖離し、国民の声が官邸には聞こえなくなっているのではないか。

一部の議員の思いだけで、政権の方向性が定められているのではないか。
現代表は、この仲間の思いをもっと重く受け止めるべきであると思います。

民主党の再生は、ここに集う私たちが自信を取り戻すことから始めなければなりません。

私たちは、「国民の生活が第一」という優先順位にもとづき予算を組み替え、子育てと教育、年金と医療、地域主権、雇用と経済に税金を集中しました。

その結果、公共事業の大幅削減、労働者派遣法の改正、子ども手当、高校授業料無償化、農家の戸別所得補償といった歴史に残る政策を実現しました。

しかし、民主党は、一方でねじれ国会を理由に、ずるずると多くの政策の撤回を続けてきました。これが国民の歓喜を失望に変えた原因です。

胸を張って堂々と主張すべきときは主張し、対決するときは厳しく対決する政党に戻らなければなりません。

私たちは仲間を大切に作る政党でありたい、と思います。

議員間の信頼関係を深めること、中央と地方の連携を深めることが大切です。サポーター、党员、地方議員、国会議員が協力し合い民主党の、政権政党としての「政党力」を高めていくことこそが重要です。上意下達の力づくの意思決定では、結集などできません。

私は党内民主主義を徹底します。地方の意見を党運営や政策に反映するため、常任幹事会に地方の代表を迎えます。

次に、政策について述べます。

自信と力を取り戻した民主党が進むべき「民主の原点」は、社会的弱者への視点であり、格差の是正です。

「財政の再建」はもちろん重要な課題です。しかし、それは国民の「生活の再建」があってこそ可能となるのです。

持続可能な社会保障制度改革は、待ったなしの課題です。社会保障はコストではなく、成長のための投資であり、経済の成長と新たな雇用を創出します。

増税分はすべてを社会保障に、つまりは国民の暮らしのために使うこと。

そして、民主の原点であるマニフェストに記載された「最低保障年金の創設」「後期高齢者医療制度の廃止」などの約束を貫き通すこと。

自民党の言う「国土強靱化計画」などの、利権がらみ、土建国家への後戻りは絶対に許さないこと。

この事無しに、国民の理解を得ることは到底困難です。

私は、原発ゼロを可能とするエネルギー供給体制を早期に確立します。

自民党総裁選立候補者は全員、原発維持・推進派です。

野田政権は「2030年代までの原発ゼロ方針」の閣議決定見送りを、代表選の地方投票締め切りを待つ様にして9月19日決定しました。これで良い筈がありません。

3.11を経験した国民の意思を尊重し、もう原発に頼った生活に戻らないということを、民主党は決断すべきです。

東日本大震災からの復興も、スピード感を増す必要があります。

被災地での生活再建は、遅々とした歩みでしかありません。

被災地の子どもたち、25,000人が転校を余儀なくされました。しかしこの8ヶ月で、ふるさとや友だちのもとに戻ることができたのはわずか200人あまりでしかないことを、野田さんをご存知でしょうか。

自民党の総裁候補が、異口同音に集団的自衛権の行使を主張しています。この主張とも明確な対峙をすべきです。

従来政府見解を尊重し、核廃絶を含む東アジアの平和の創造にイニシアチブを発揮すべきです。

16年前、55年体制に代わり、政権を担いうる新たな政治勢力の結集を旗印に、第1期民主党は産声をあげました。自民党という巨大な保守政党に対峙し、民主・リベラルの旗を掲げ、さまざまな所属政党と袂をわかって、政権交代を目指し、歩みを始めたのです。

幾度かの困難や、試行錯誤を乗り越えて、今の民主党へと結集がなって10年、歴史は短いようですが、数え切れない人々の努力と思いが重なって、政権交代が成就したのです。

それは決して、一時のブームや個人的人気で、成し遂げられたものではありません。

この間70人を超える多くの仲間が党を離れていきました。私はこれ以上、仲間が去っていくのを見送りたいはありません。

この代表選を通じて、4人の候補が党の向かうべき方向について議論しました。

貴重な機会であったと思います。この代表選挙が、民主党の団結と絆を強める機会になることを、私は強く望んでいます。こうした場を与えていただいた皆さんに、心から感謝します。

論語にこのような言葉があります。

「寡なきを患えずして、均しからざるを患う」

(すくなきをうれえずして ひとしからざるをうれう)

為政者は、国民の富が少ないことよりも、国民が平等でないことに対し、不満を抱くことを心配すべき との意味です。

日本の政治を、かつての新自由主義にも、自民党の時代にも決して戻してはなりません。

私達民主党に結集する者全てが、渾身の力を奮い、共に新たな地平を切り開く覚悟と誇りをもって前進しようではありませんか。

ありがとうございました。